



TITLE:

京都支部・京星會だより(七月):支部欄

AUTHOR(S):

---

CITATION:

京都支部・京星會だより(七月):支部欄. 天界 1935, 15(173): 441-442

ISSUE DATE:

1935-08-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167086>

RIGHT:

## 支部欄

### 京都支部・京星會だより(七月)

六月下旬の大豪雨に無慘に荒された京の町も七月に入つて復舊、復興工作が着々と進み、中旬にはもうすっかり平常にかへつた。天災の後のあわただしい月で天候も悪い日が多く星に親しむ日も少なかつたが、京星會として次の事業が行なはれた。

○**京星**「七月號發行 會員の親睦と天文趣味の助長を計るためのやさしい天文に關する讀物として隔月毎に發行され、會員に配布される會誌「京星」の七月號が七月一日發行された。

主な内容は、1935年の火星を送つて(花山天文臺木邊成麿)、1935年 火星協同觀測(遊星課前田治久)ハルキユリス新星發見事情(大英天文協會會誌第45卷第3號より譯)七・八月の天象と觀測(九部)、特輯“星を知り初めたころ”(六篇)星の隨筆、會報會員消息等、「天界」型で謄寫版印刷六十一頁のもの、百五十部發行された。

○**七夕の集ひ** 我國に古くから傳へられる床しい天文行事の一つである七夕の夕が近づき、五色の短冊に飾られた笹竹が京の街々に見られる。同市内の同好者によつて結ばれた京星會として初めて迎へるこの七夕の夕を意義あらしめるために七月七日夜、加茂川植物園横川原に於て七夕の集ひが催された。出席者は十餘名この日は特に望遠鏡は一臺も持出さず、暗黒の林と山を背景に澄切つた空に白い雲の様に流れる銀河と今宵を晴れと輝く牽牛織女の二星を眺めつゝ、古代の傳説星話神話に花を咲せ初めて會つた者同志もすぐ打とけて愉快に時を過し銀河が天頂に近づく頃ようやく散會した。

○**京都支部例會** 京都市の同好者諸氏の 懇談親睦 と趣味の向上のために開かれる事になつた京都支部例會の第一回が七月十三日午後五時より天文臺圖書室で開かれる筈になつてゐたが、雨天のため出席者少なく例會としての形式を抜きにして協會應接室に於て高城、荒木兩先生を主賓にして出席した數名の者が協會支部天界等に就て種々懇談した。九月から亦協會例會當日例會開始前に開かれる筈であるから諸氏の御出席を希望します。

○**速報**「發行 六月以後に發行された「京星速報」は以下の通りである。

NO. 15 ヘルクレス座新星増光(六月一日). NO. 16 大阪の隕石は誤り(六月十八日) NO. 17 七夕の集ひ通告(七月五日). NO. 18 天文圖書の調査(七月二十六日)

○八月五日から大阪市の天文協會と共同でペルセウス座流星群協同觀測が行なはれる. 詳細は「京星」「ミルキイウエイ」各七月號にある.(宇野生)

## 新に大阪支部を設置せよ

地方委員 西 森 菊 雄

東亞天文協會が頗る刷新展開を期して支部の強化, 地方委員の設置天界の改革, 新雑誌の創刊等と新機運の醸成に, 亦大阪市にプラネタリウム, 生駒山上に民衆に公開される氣象天文臺の實現も時日の問題となつたのは偏に會長始め方々の御盡力によるもので邦家天文學界の爲に欣ばしき次第である, 是等の實現は大いに國民の天文學教育に寄與する處大で遅れ勝ちな我が天文學に拍車をかける事になる.

日本の一般國民の教育程度は決して歐米諸國に比して劣つてゐるとは言へないのであるが天文學の知識となると其は危い, 是は天文學は難しいもの, 大望遠鏡が要るもの, 實社會とは縁遠い學問であると言ふ先入主の爲でもある, 然し雜然たる星の配列から星座を見出し神話を回想し, 大小色さまざまな星の瞬きに見入り, 變光星・流星・黃道光・太陽黑點を肉眼或ひは小望遠鏡で觀測する事は易く, 誰にも興味となるものである, 是等を出發點として多人數に天文學の理解を進める事は容易である, 地方に於ける先輩者が入門者を指導し, 共に研究する團體を持つ事は之等を實現する機關として必要である, 今日迄協會が其の爲に當地に支部を設けて來たのであるが愈々實績を擧げべく積極的に支部の強化を計るのは吾人として既に遅しの憾みもないではない.

新たに出来るプラネタリウム, 生駒天文氣象臺の設立によつて新會員が殺到して入會し, 亦舊會員間の親密の度も加へられる事も想像出来る, 其の時, 大阪支部の存否は大きな役割を左右するものである, A. A. R 天文研